

故 坪沼秀昌教授の思い出

賀 川 昭 夫

坪沼さんが2010年3月30日に亡くなられた。3月3日の午前10時半頃、坪沼さんから私の研究室に電話があり、体調が良くないので精密検査を受けたところ、その結果が分かり、ベッドが空き次第入院して治療することになったので、4月からの新学期に講義をすることが出来なくなった、とのこと。生真面目で責任感の強い坪沼さんは、別の人に講義を担当して貰わなければならないことを、本当に恐縮されていた。3月9日に入院され、そして3月30日に遠くに逝かれてしまった。

坪沼さんが東京経済大学に着任されたのは1990年4月なので、本学に20年間勤められたことになる。その20年間で、私が坪沼さんと話を交わした時間は、延べにして数時間にも満たないであろう。それは、私が他人とコミュニケーションをとることが苦手なことに原因があるが、坪沼さんは私以上に他人とコミュニケーションをとることが苦手なようであった。シャイで寡黙、そして、あのはにかんだ笑顔。これが私が坪沼さんの外見から得た印象であり、大方の人の持たれた印象も同じであったと思われる。

しかし、坪沼さんとはびきり頭のよい方であった。たとえば、研究会での坪沼さんのコメントは、発表されている論文の最もクルーシャルな点に関してであった。報告されている論文の内容と論文が持つ意味を正確に理解し、その論文で最も重要なポイントを見つけ、設けられている仮定の正当性や、別の仮定に置き換えれば論文にさらなる意味を追加できることなどを、ボソッとコメントされていた。2011年2月に研究会に来られた神戸大学・入谷純教授は報告の前に、坪沼さんは発表のとき、いつも有益なコメントをして下さったと、坪沼さんに対して弔意を表された。

また、坪沼さんがこれまでに書かれた論文は、外国のハイレベルな専門誌に投稿されていれば掲載されたであろうと思われるほど、質の高いものである。彼は、それまでの先行研究で見落とされている論点を取り上げて、それを比較的シンプルなモデルで分析し、しかし、一般性のある結論を導き出されている。これは誰にでも出来る技ではなく、坪沼さんの類い希なる分析能力の高さを表すものである。彼の問題意識は一貫して、フリーライダーや情報の非対称性に関してであった。これらは分析されることが必要ではあるが一筋縄ではいかないテーマであ

故 坪沼秀昌教授の思い出

り、彼は積極的に困難なこれらの問題に取り組みれていた。例えば、坪沼さんの修士論文では、公共財経済において、公平な配分がナッシュ均衡として実現するための必要十分条件を真の選好に関して導出されている。坪沼さんがこのような良質な論文を海外の一流のジャーナルに投稿されていれば、掲載されて、海外でも広く注目されたに違いない。彼の書かれた論文は珠玉のように輝いている。

坪沼さんの主たる講義科目は金融経済学であった。金融を学んだ学生が金融機関に就職したときに、金融工学の知識が全くないと困るであろうと考えられて、金融工学という科目を新たに開設し、自ら進んでその科目を講義されていた。また、私は学生から坪沼さんが様々な講義で配布されたプリントを見せて貰ったことが幾度かあったが、坪沼さんの配布プリントを集めれば、各科目のコンパクトで最良質なテキストになったはずのものであった。

坪沼さんは2007年度からの2年間、経済学部教務主任を務められた。事務能力抜群の坪沼さんなので、とても手際よく教務関係のことを裁かれていた。私は坪沼さんに、そんなに上手に教務主任をやっていると学部長をやらされるよ、それが嫌なら何かチョンボをやっておかないと、と冷やかしたことがあったが、そのとき坪沼さんは本当に困った顔をされていた。学部長になるのは嫌だが、チョンボをするのも坪沼さんの美学に合わなかったのだろう。坪沼さんは教務主任の他にも激務の役職に就かれていたが、研究に集中できる環境にあれば、坪沼さんはハイレベルな論文を書き続けられたに違いない。本当に優秀な研究者であり、周りから尊敬されていた坪沼さんが53歳という若さで亡くなられたのは、残念以外のなにものでもない。